平成31年度　学校経営計画に対する最終評価報告書

具体的取り組み	主担当	現状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題） 及び　次年度の扱い（改善策等）	備考
1　3年間を見通した進路指導体制を一層充実させ、生徒に高い志を持たせて、一人一人の進路実現を図る。							
① 放課後補習を効果的に行い、大学入試に対応できる基礎学力定着と応用力養成を図る。	進路指導課 各教科 3年学年会	習熟別補習が定着し一定の成果が見られる。さらに志望や適性に応じた緻密な計画に基づく補習を展開し、生徒全員の進路実現につなげたい。	【満足度指標（生徒）】 放課後補習は受験学習に効果的に作用している。	効果的に作用していると評価する生徒の割合が A　85%以上である。　B　80%以上である。 C　75%以上である。　D　75%未満である。	「役立っている」「どちらかと言えば役立っている」の割合が、74.4% （第2回学習実態調査）	昨年比べ0.5ポイント低い数字となった。昨年度よりも学力、志望系統別に細かく分割した補習を実施したが、数字を伸ばすことはできなかった。低学力層が例年よりも多く、十分に対応できなかった。習熟の編成・教材の選定にさらに工夫していくことが必要である。	昨年度「役立っている」「どちらかと言えば役立っている」の割合が、74.9% （第2回学習実態調査）
② 個人面談を通して生徒理解に努め、生徒個々に応じた進路指導を実践し、3年間を見通した進路指導体制の充実に資する。	進路指導課 学年会	教員と生徒との信頼に基づく面談は十分に機能している。より進路指導に係る知見と助言力を高め、生徒の進路選択を支援したい。	【満足度指標（生徒）】 担任との面談が自分の進路目標設定や進路実現に有効である。	進路を考える上で担任との面談が参考になったと思う生徒の割合が A　95%以上である。　B　90%以上である。 C　85%以上である。　D　85%未満である。	「担任との面談が参考になっている」「少し参考になっている」の割合が 1年　90.2% 2年　87.4% 3年　87.8% 平均　88.4% （同上）	3年で数値が昨年度より下落したが、1・2年では増えており、3学年の平均ではほぼ昨年並みとなっている。本校の特徴として広く認識されている「生徒と教員の距離感の良さ」を支えているのは、担任が生徒に親身にアドバイスを行う面談である。今後とも、生徒が求める学習方法に対して、実践的、具体的かつ効果的なアドバイスを提供できるよう、進路指導課と学年会との連絡・意思疎通を密にしていきたい。	昨年度「担任との面談が参考になっている」「少し参考になっている」 1年89.7%　2年84.0% 3年95.1% 平均89.6% （同上）
③ 大学合格者数の数値目標を達成する。	進路指導課 3年学年会 教務課 各教科	授業第1主義を貫き、高い学力を持つ生徒をさらに伸ばし、基礎学力に課題を有する生徒には手厚い指導をより充実させ、生徒個々の能力を最大限に引き出す必要がある。	【成果指標】 国公立大学合格者数	国公立大学合格者数が A　60人以上である。　B　50人以上である。 C　40人以上である。　D　40人未満である。	国公立大学合格者数は45名（現役44、過年度生1）であった。	推薦・AO入試を効果的に利用した結果、国公立大学の合格者は昨年度とほぼ同数であったが、地元を中心とした公立大学の合格者が昨年よりも10名ほど減少した。個々の生徒の特徴に合わせた進路指導が今後今まで以上に大切になる。	昨年度の国公立大学合格者56名（現役52、過年度生4）
			【成果指標】 地元の金沢大学と難関大学の合格者数	金沢大学及び難関大学の合格者数合計が A　15人以上である。　B　10人以上である。 C　5人以上である。　D　5人未満である。	名古屋大学合格者1名、金沢大学合格者数5名（現役4過年度生1）であった。 （奈良女子3名）	金沢大学合格者は、昨年度4名から5名と増加した。難関大学の合格者を複数名出していけるように、志望別に添削指導や学習内容の指導を的確に行っていく必要があると思われる。	昨年度 大阪1、名古屋1 北海道1、お茶女1 金沢4
学校関係者評価委員会評価	在籍生徒の1/4が国公立に進学しているのは素晴らしい。さらに難関国立への合格者も複数いることは称賛できる。						
上記評価をうけた今後の改善策	昨年度に比べて難関校への合格者数が減少している。新3年生には難関校を狙う学力を持つ生徒が複数名いるので、全職員で入試問題の研究や生徒への進学指導をさらに進めたい。また、北陸3県の国公私大にも対策を練ることを計画している。						
2　授業と家庭学習の相関を高め、学習内容の確実な定着を図るとともに、「主体的・対話的で深い学び」を実現するための研究と実践を進める。							
① 中高交流研究授業、校内公開授業など諸研究授業の実践・参観及び研究協議会やICT活用研修会を通じて、教科指導法等の技能を高め、生徒の思考力の向上に努める。	教務課 各教科	研究・公開授業の実施など各教科での努力により比較的良好な結果が出ている。生徒の資質や適性を把握し、授業での工夫と改善を今後も地道に続けたい。	【満足度指標（生徒）】 授業において自ら深く考える機会があり、学習に対する大きな刺激となっている。	授業において、自ら深く考える機会があり、学習に対する大きな刺激が得られたという生徒の割合が A　80%以上である。　B　70%以上である。 C　60%以上である。　D　60%未満である。	国語　82%　地公77% 数学　82%　理科80% 保体　70%　英語83% 平均　79% （生徒による授業評価　問6と問7の平均）	各教科の授業の工夫もあって、どの教科も評価が向上している。ただし「深く考える機会」の評価が低下している教科もあり、今後も研究・公開授業で自教科のみならず他教科の実践をも活かして工夫と改善を推進していきたい。	昨年度 国語　82%　地公75% 数学　82%　理科77% 保体　70%　英語82% 平均　78%
② 家庭学習時間調査を通じて、生徒の学習状況を把握するとともに、学年会と連携して各種課題提出の徹底を図ることにより、家庭学習習慣の確立に努める。	教務課 各学年会 各教科	家庭での学習時間が十分とは言えない。生徒が自主的に学習に取り組む習慣を育むために、各教科が具体的な指示を与えつつ内発的な動機を促したい。	【成果指標】 1日平均の家庭学習時間を1年生120分、2年生120分、3年生220分とする。	目標時間を達成している生徒の割合が A　70%以上である。　B　60%以上である。 C　50%以上である。　D　50%未満である。	1年　35% 2年　54% 3年　36% 平均　41% （学習時間調査）	昨年度に比較して、家庭での学習時間は大幅に減少している。そして家庭学習時間が不足と感じる場合の最も大きな理由に、携帯電話・スマートフォンをあげる生徒が増加している。ホーム担任・教科担当のみならず部活動顧問を含む全教員で、時間を有意義に過ごすための指導を進めていきたい。	昨年度 1年　54% 2年　66% 3年　54% 平均　58%
		部活動休養日の設定による時間的な余裕に比して、家庭での学習時間が確保できていない。授業との相関を意識させながら、課題学習に取り組む環境を整える必要がある。	【満足度指標（生徒）】 家庭での課題学習が効果的であると考えており、自ら積極的に取り組んでいる。	家庭での課題学習が、授業での学習の際に効果的であると捉え積極的に取り組んでいる生徒の割合が A　80%以上である。　B　70%以上である。 C　60%以上である。　D　60%未満である。	1年　88% 2年　72% 平均　80% （第2回学習実態調査）	家庭学習時間が目標を達成できている生徒の割合が低いにもかかわらず、家庭での課題学習が授業での学習の際に効果的であると捉えている生徒が多い。課題や授業の内容やレベルを検討・改善して、より一層、課題学習に取り組む環境を整えていきたい。	昨年度 1年　74% 2年　78% 平均　76%
③ 土曜補習（Sゼミ）を効果的に実施し、学習における基礎基本の定着を図る。	教務課 各教科	土曜補習については、各年度ごとに改善や修正を行い、より効果的な実施を目指している。ただし、効果があると考えている生徒の割合は目標を下回っている。各委員会、学年・教科会でより効果的な方策を追求する。	【満足度指標（生徒）】 土曜補習（Sゼミ）は学習意欲の喚起、基礎学力の養成に効果があると考えている。	効果があると考えている生徒の割合が A　80%以上である。　B　65%以上である。 C　50%以上である。　D　50%未満である。	1年　57% 2年　54% 平均　55% （第2回学習実態調査）	今年度、途中からではあるが土曜補習の年間計画をたてて、毎回の達成目標を示した。そのためか効果があると考える生徒の割合は昨年度より増加してきている。次年度では当初から土曜補習の年間計画を立て、補習内容をさらに吟味して実施することで、生徒の評価をあげていきたい。	昨年度 1年　49% 2年　42% 平均　45%
学校関係者評価委員会評価	授業評価は概ね良い数字が出ているのではないか。一方で家庭学習時間の減少が気になる。また、土曜補習の成果はどれほど得られているのかも疑問である。						
上記評価をうけた今後の改善策	職員の授業力向上への意欲は高い。そのことが授業評価にも表れている。家庭学習の減少は、ただ課題を与えて時間を増やすような手法でなく、生徒の学びへの主体性をいか育むかを考える必要を感じている。 土曜補習については、演習問題を各学力層に合わせて作成し、生徒の「できる」「わかる」を引き出し学習意欲に繋げるようにする。						
3　生徒個々の人格の陶冶を目指し、部活動や生徒会活動の活性化を図るとともに、地域行事等への積極的参加を促す。							
① 部活動の内容を充実させ、活性化を図り、文武両道を目指す。	生徒指導課	1年生は全員部活動に加入しているが、活動に満足している生徒は後半に従って低下傾向にある。その原因を検討するとともに、より満足度を高める工夫が必要である。	【成果指標】 1年生の部活動に対する満足度を高める。	満足している1年生の割合が A　80%以上である。　B　60%以上である。 C　40%以上である。　D　40%未満である。	「満足」、「どちらかといえば満足」の割合が 84．31%（第1回学習実態調査） 88．70%（第2回学習実態調査）	1年生の全員部活動加入については、部活動に対する満足度は85%を越え、全体的に理解されている様子が窺える。部活動の活性化のために、次年度も継続していく。	「満足」、「どちらかといえば満足」の割合が69．1% （第2回学習実態調査）
② 運動部の競技力向上を図る。	生徒指導課	体操部や放送部が全国大会に出場している。ただし、男子の部活動と団体競技の強化が課題である。	【成果指標】 県高校総体で総合順位25位以内をめざす。	県高校総体順位が A　25位以内である。　B　26位～30位である。 C　31位～35位である。　D　36位以下である。	平成28年度は33位 平成29年度は25位 平成30年度は35位 今年度　男子30位、女子26位、　総合33位	この項目が運動部に限定しており、本校の部活動の種類から推定すると県内で上位に入っていくのは難しい。 相対的な評価より、文化部を含め、県大会のベスト8以上の数や北信越大会などの上位大会に出場する部活数などで評価するのが妥当であろうと考える。	総合35位 （男子40位　女子25位）
③ 部活動が地域や中学校との連携を図り、地域に愛される学校づくりを目指す。	生徒指導課	多くの部活動が地域のボランティア活動や中学校との合同練習を行っている。地域や中学校との交流をさらに活発に行いたい。	【成果指標】 全22の部活動が年1回以上、地域や中学校と連携し、活動を行う。	地域や中学校と連携し、活動を行った部活動が A　20以上である。　B　16以上である。 C　12以上である。　D　8未満である。	「実施した」が（12）、実施予定のない部活が（8）である。	中学校との連携は双方の部活動の有無が一致していないものがあるので、全部活動に中学校や地域との連携を求めることには無理がある。むしろ、学校として夏休みの体験入学だけでなく、聖高祭や学校公開日などを利用して、中学生や地域の方を呼び込む工夫が必要である。	昨年度 12の部活動が地域または中学校と連携して活動した。
学校関係者評価委員会評価	部活動の成果としての順位も大切だが、生徒の満足度が高いことは評価に値する。吹奏楽部が地域イベントに協力したり、近隣や山林の清掃ボランティアに参加してくれていることには感謝している。						
上記評価をうけた今後の改善策	クラス数13という少ない生徒数の中で、上位に食い込むことはなかなか難しい。評価の基準・方法を見直す必要があると考えている。ボランティア参加は生徒にとっても自己有用感を得られる貴重な経験である。これからも大切にしたい。						
4　挨拶の励行や交通ルールの遵守などの指導を丁寧に行い、基本的生活習慣の確立と規範意識・マナー意識の高揚を図る。							
① PTAと連携し登校指導や挨拶運動などを通して、挨拶の励行及び正しい制服の着こなしと規範意識、マナー意識の高揚を図る。	生徒指導課 総務課 学年会	交通マナーやJR乗車マナー、服装容儀、挨拶については年々向上している。地域の範となるべく、より高いレベルを目指す。	【満足度指標（保護者）】 生徒の挨拶がしっかり行われていると感じている。	生徒の挨拶がしっかり行われていると感じている保護者が A　90%以上である。　B　75%以上である。 C　60%以上である。　D　60%未満である。	「生徒の挨拶がしっかり行われている」の割合が76% （保護者アンケート）	「マナーや服装容儀、生活指導が適切になされている」という観点では84%であったのに対し、挨拶に関しては若干低い評価であった。登校時、生活委員や野球部を中心とした部単位による挨拶運動を行っているが、生徒の意識を高めるまでには至っていないと思われる。挨拶運動を継続しながら、集会等あらゆる場面で挨拶の大切さを指導していくことが必要だと思われる。	昨年度 「規範意識、マナー意識が向上したと感じる」85% （保護者アンケート）
② 遅刻の管理をし、基本的生活習慣の確立をさらに推し進め、学習環境を充実させる。	生徒指導課 学年会	例年、冬季に遅刻が増加する傾向がある。基本的生活習慣を確立し、落ち着いた雰囲気で朝学習を始められるよう指導を徹底したい。	【成果指標】 1日の平均遅刻者数が1人以下になることを目指す。	全体の1日平均の遅刻者数が A　0．5人以下である。　B　1人以下である。 C　3人以下である。　D　3人を超える。	1日平均　人 1学期1日平均　0．83人 2学期1日平均　1．39人 3学期1日平均　1．13人	昨年度に比べ遅刻者数は減少した。。 一方で、同じ生徒が遅刻を繰り返すことが多く、特に3年生の遅刻が目立った。反省文を書かせるなどの指導をしているが改善しない生徒もいる。規律ある生活習慣を確立させるためにも、粘り強く指導していきたい。	平成27年度　0.5人 平成28年度　1.1人 平成29年度　1.5人 平成30年度　1.6人 令和元年度　0.9人
③ いじめのない学校づくりをめざし、共通理解に基づいて、全職員がいじめの早期発見・早期解決に向けて連携する。	生徒指導課 保健相談課 学年会	日常的指導に加え、講演会などの取組を進めるとともに、アンケートや生徒との面談を通じて情報収集と指導を図っている。	【努力指標】 課題のある生徒への対処で、学年会や教育相談、生徒指導などが十分に連携している。	連携しているとする教員の割合が A　90%以上である。　B　80%以上である。 C　70%以上である。　D　70%未満である。	「課題のある生徒への対処で、学年会や教育相談、生徒指導等が十分連携している」の割合が　89% （教員アンケート）	特別指導等の件数においては昨年度より減少したが、何らかの課題がある生徒は1年生を中心に増えていると感じる。昨年度より連携しているとする割合が高くなっていることから、課題のある生徒に対して常に情報を共有できるよう学年会や相談室・保健室、さらにスクールカウンセラーとの連携の意識は高くなっているといえる。	「課題のある生徒への対処で、学年会や教育相談、生徒指導等が十分連携している」の割合が　79% （教員アンケート）
学校関係者評価委員会評価	朝、通学中に大きな声であいさつしてくれる生徒が多く気持ちがいい。また、職員の方々も時々通学路に見守り出でくれることが地域の安心感になっている。						
上記評価をうけた今後の改善策	地域の方から良い言葉をもらい大変ありがたい。今後も職員・生徒とともに地域を大切に試合される学校であるよう努力したい。						
5　業務の精選・効率化・平準化に取り組み、生徒と向き合う時間を確保しつつ、時間外勤務時間の縮減に努める。							
① 学校全体や担当する分掌において、業務の精選・効率化に取り組む。	全員	個人で担当する業務に関しては、工夫して実行することが比較的容易であった。各課の業務の差配を的確に行い、課全体での取組事項を考える必要がある。	【成果指標】 業務の精選・効率化につながる取組を考え、実行する。	担当する分掌において、具体的な取組を考え、実行した教員の割合が A　90%以上である。　B　80%以上である。 C　70%以上である。　D　70%未満である。	「分掌で業務の精選や効率化の取組をしている」と回答した割合が　77% （教員アンケート）	やや数値を下げた。個人で担当する業務と個人を越えた課全体での取組事項の場合とにやや差があり、課全体での共通理解が来年以降の課題となる。	「分掌で業務の精選や効率化の取組をしている」と回答した割合が82% （教員アンケート）
			【満足度指標】 学校全体の取組として、業務の精選・効率化が進んでいると感じられる。	学校として多忙化改善のための取組が進んでいると感じている教員の割合が A　90%以上である。　B　75%以上である。 C　60%以上である。　D　60%未満である。	「学校全体として多忙化改善の取組が進んでいると思う」と回答した割合が35% （教員アンケート）	昨年に続き、会議等の回数削減や時間短縮などは実行できた。次年度は、効率化を更に追求するとともに、行事・Sゼミ・補習・模試全般の見直しなど業務そのものの改革・削減を図ることが必要である。	「学校全体として多忙化改善の取組が進んでいると思う」と回答した割合が　41% （教員アンケート）
② 部活動運営において、時間を意識した効率的な指導を行う。	部活動顧問	年度後半になるに従い、実践の割合の低下が窺えた。4月時点での計画を年間を通して実行することに、やや困難を感じた部顧問が増えたためと考えられる。	【成果指標】 適切な部活動計画を立て、年間を通じて遂行する。	適切な計画を立て、かつ、おおむね実行できたと考える教員の割合が A　90%以上である。　B　80%以上である。 C　70%以上である。　D　70%未満である。	「部活動の運営において適切な計画を立て実行している」と回答した割合が80% （教員アンケート）	7月時のアンケートでは「あてはまる、ややあてはまる」と回答した割合が89%であったが、12月時では9ポイント低下した。これは昨年と同様な結果であり、4月当初の計画を年間を通して実行することに、やや困難を感じた顧問が増えたためと考えられる。次年度は、より精度の高い計画が必要である。	「部活動の運営において適切な計画を立て実行している」と回答した割合が　80% （教員アンケート）
学校関係者評価委員会評価	教師の多忙化は日常的によく耳にする。ぜひとも業務改善を行い、生徒にゆとりを持ちながら向き合えるようにしていただきたい。						
上記評価をうけた今後の改善策	諸会議の時間短縮のための工夫や効率化のための削減などに着手している。また、部活動についても練習時間の短縮化と効率化に各顧問が取り組んでいる。						